
アイヌ民族博物館だより

THE AINU MUSEUM 2002. 9. 30 No. 49・50 (合併号)



2002年5月12日、アイヌ民族博物館ポロチセで、第一回「春のコタンノミ」が開催されました。コタンノミは今ではほとんど忘れ去られた感のある儀式ですが、かつては各地のアイヌ集落で春秋に実施されていた年中行事。神々の加護と無病息災を願って、地元・近隣の関係者が多数参加しました。(記事参照)

目次

館長就任にあたって 中村 齋	2
葛野辰次郎工カシを悼む	3
コタンノミ(春秋の村祭り)の復活	4
将来に向けての捕鯨 第4回世界捕鯨者協議会総会報告	7
博物館短信	9
出版案内	12

アイヌ民族博物館だより No. 49・50 (合併号)
2002年9月30日発行
編集・発行 財団法人アイヌ民族博物館
〒059-0902 北海道白老町若草町2丁目3-4

電話 0144-82-3914 FAX 0144-82-3685
ホームページ <http://www.ainu-museum.or.jp>
Eメール museum@ainu-museum.or.jp
印刷 株式会社北海道機関紙印刷所



館長就任にあたって

中 村 齋

2002年3月、幾度目かのフィンランド行きを目前にして、突然、財団法人アイヌ民族博物館から、館長就任の打診があった。

いまは昔、1984年6月、当時の白老民族文化伝承保存財団（現財団法人アイヌ民族博物館）山丸武雄理事長、北海道ウタリ協会の野村義一理事長、貝沢正副理事長らと共に、フィンランドの北ラップランド州イナリ市を訪れた。

彼の地に住むサーメ民族との交流を始める目的であった。以来、北欧全域のサーメとの交流が続いているが、民族の復権を果たすために、先住民族自身が何をなすべきかの多くを学ぶきっかけを作った。と同時に、白老のアイヌ民族が世界にデビューした先駆けともいえる。

それが縁で、私は1986年、アイヌ民族博物館開館の年から数年間、博物館の体裁を整えるためにお手伝いする事になる。

1986年6月には、本格的な野外博物館建設のため、ハワイのポリネシアン文化センターを訪ねた。1987年3月には、共産党執政下のソ連邦モスクワに赴き、アムール流域やサハリン等極東域先住民族との交流を約した。

この時期は、観光のための文化公開から進んで、民族の尊厳確立のための文化公開に一步踏み出した時であった。

短期間に、諸外国との展示交流や先住民族フェスティバルの開催、研究報告・絵本・アイヌ文化の基礎知識等の出版と一気に突き進んだ感があるが、当時の財団の経済力と、山丸武雄氏の未来像が背景にあったことは否めない。

諸般の事情により、私は志半ばにして手をひく結果となったが、その後、陰ながら成長を見守ってきた。しかし、もう一度現役に復帰することは一切考えていなかった。したがって、お誘いの件はフィンランド旅行中の課題となって

いた。

イナリのサーメ博物館は先代ヨンパネン氏が始めた小さな野外博物館が土台になって、今大きな博物館に変貌している。館長は息子さんのタルモ・ヨンパネン氏である。1999年3月、この新しい博物館を訪れた時は、古い野外博物館は雪の中にあったが健在だった。

そして今回。若いヨンパネン館長は新しい抱負を語った。学芸員も整備されつつあった。

この博物館はラップランド州の国立公園の自然ガイドの機能をも持っていて、多くの自然派の拠点にもなっている。また、地域のサーメ集落の中核にもなっていて、サーメ文化体験学習希望者を案内してくれる。

先住民族としてアイヌと同じ歴史を歩み、同じ社会環境にあるサーメが、非常に上手な文化の紹介の仕方ができるのはなぜか。それは、真の意味での民族教育から生まれた民族の団結と、人材を基盤にした、民族自身のアイデアによる経営があるからだと思う。

今の自分に一体何ができるのかという思いを抱いてのフィンランド行きで、一つの示唆を得た私は、もう一度アイヌ民族博物館のお役に立とうと決心を固めた。

現在のアイヌ民族博物館は二つの大きな試練に直面している。

- 1．財政の悪化。
- 2．イオル構想の中核としての責任。

そして、サーメ民族がすでに果たしている民族教育と自立を並行して行かなければならないジレンマ。

多分この仕事は私の最後の大きな仕事になるだろう。手に余るかもしれない。しかしながら、300余年の長きにわたって圧迫されてきたアイヌ民族の苦悩に比べれば、はるかに軽い苦勞ですむ。圧迫民族の末裔としての苦悩だとしたら、それも甘んじて受けよう。せめてもの贖罪として。

葛野辰次郎エカシを悼む

静内地方の伝承者、葛野辰次郎エカシ(長老)が2002年3月27日逝去された。91歳だった。

葛野エカシは改めて紹介するまでもなく、儀式伝承をはじめアイヌ文化伝承の最後の巨星のひとりだった。エカシに導かれてアイヌ文化伝承の道に入った人もある。アイヌ民族博物館でも博物館地鎮祭(1983)同新築祝(1984)守護神の送り儀礼(1988,1991)イオマンテ(1989)ポロチセ新築祝(1997)など、節目となる重要な儀式には必ずエカシの指導を仰いだ。

当館では昨年度、これら収蔵する葛野エカシの全記録資料を収めた『伝承記録7 葛野辰次郎の伝承』(2002年3月刊 p.12)の刊行を計画し、私はその編集を担当した縁で最晩年のエカシに接する機会があった。直接にはこれが私とエカシの唯一の接点であり、その任でないことは重々承知しているが、刊行の感謝と畏敬の念を込めてここに拙文を記し、追悼としたい。

私は昨年9月から10月にかけて週一回、葛野エカシのご自宅を訪問し、編集過程で生じた疑問点をお聞きすることになっていた。

調査日、エカシはご自宅の居間に据えたベッドに横たわっていた。瘦身のエカシが益々痩せ小さく見えた。初対面は1997年のポロチセの新築祝。以来私にとってエカシはその儀式や著作、資料を拝見する中でほとんど神様に近い存在になっていた。「聞きたい事は今のうちに」とエカシの二男次雄氏は諒解して下さったが、長く病床にあることは聞いていたので調査は一層憚られた。

しかしエカシは「最近誰も来ない」と言い、自分の思いを受け取ってくれる人を待っていたと言った。たとえそれがシャモ(和人)であっても良いと感謝の言葉さえ口にした。ただ「ところであんた、どっから来たって?」と、3週間ぐらいいは私を覚えてもらえなかった。あるいは最後までそうだったかもしれない。

「分からない事ばかりで」と恐縮する私に

「俺もどこで何やったか分かんない」ととぼけておられたが、97年のポロチセ新築祝の祈り詞など昨日のここのように解説された。ただ、囁れ声が一層囁れ、度々咳き込んで話を中断した。やはり気がとがめた。



それから半年が過ぎた3月26日、当館の村木美幸学芸員と私は『伝承記録』の事業完了のご挨拶に葛野家を訪れた。まだ本は完成していない。4月10日のエカシ92歳の誕生日に届けられればと考えていた。だが、エカシは2日前に入院されたという。容態もろくに聞かぬまま果物など買い、次雄氏と共に病院を訪ねた時、エカシはすでに集中治療室にいた。午前中は意識がはっきりしていたそうだが、私たちが訪れた午後には昏睡状態であった。村木が「爺、もうすぐ本できるからね、頑張るんだよ」と耳元で何度か呼びかけるとエカシの手が動いた。医者は「あと数時間もかもしれない」と言った。

亡くなったのは翌日未明。その日のうちに急遽札幌の製本所から伝承記録を数冊届けてもらい、それを手にエカシの教え子の一人、野本正博学芸員と葛野家に走った。枕元に本を供え、そのままアイヌプリ(アイヌ式)の葬式、告別式、埋葬、家焼きまでの4日間を静内で過ごした。皆と違い葬具作りも何もできない私はただ冥福を祈るしかなかった。

半年前エカシは語った。「この爺様はいかなる爺様であったか。それを調べるには、その悔やみがあった時に行ってみるもんだと。はあ割に大勢がある。はあ、この人は元気健やかかの際には、世間に対して立派な人間であった。そういうことが分かる。」

100歳まで生きたいと言われたエカシだったが、葬儀にはアイヌ、和人を問わず全国から大勢が集まった。きっと「はあ、割に大勢がある」と見ておられたに違いない。合掌。

(安田益穂)

コタンノミ（春秋の村祭り）の復活

実施の経緯

アイヌ民族博物館では例年5月1日に「ポロトコタン安全祈願祭」を実施してきた。これは観光シーズンの幕開けに実施されるポロト湖の「湖開き」に当たる。地元白老町、白老町観光協会、白老観光商業協同組合、当館の理事者などの関係者や一般来館者、総勢100人近くが見守る中、湖開きの神事を司るのはアイヌ衣装を着た当館職員一同。入場口の前に聳えるコタンコロク（村長）像の前にごさを敷き、臨時の祭壇と焚き火を設け、伝統儀式の形をする。しかし伝統儀式というには中途半端、担当する職員にとっては文化伝承をしているというプライドを持てるようなものではなく、どうにも居心地の悪いものであった。

余談だが、例年白老港を会場として実施されてきた「しらおいチェブ祭」（前号参照）は、昨年来「港では集客力がない」という館外の声によってポロト湖畔に会場を移した。私たちの博物館は例年、同祭の開会式典を兼ねてペッカムイノミ（初鮭を迎える儀式）を担当してきたが、私たちは港からポロト湖への儀式会場移転に反対し、結局ペッカムイノミは同祭とは別に博物館単独で実施することになった。私たちの主張は「鮭が上らない所で鮭の祭りはできない」というごく当たり前のものだったのだが。

日常のどんな事でも神に祈願・感謝を怠らないのがアイヌの信仰であり、たとえ祭りの開会式典や湖開きであっても、それが真摯なものである限り儀式を実施して構わないと私たちは思っている。だが、儀式本来の目的が「集客」「観光」「補助金」などに埋もれてしまうことに対する私たちの違和感は、なかなか理解してもらえない。

さて話を戻そう。従来の安全祈願祭を儀式伝承を主眼としたものに変えたいと考えた私たちは、今から4年前の1998年4月29日、藤村久和

氏（北海学園大学教授）の指導の下、儀式の勉強会を兼ねる形で一度だけ実施したコタンノミ（集落の祭り）のことを思い浮かべた。藤村氏によれば、コタンノミとはイヨマンテ（熊の霊送り）やチセノミ（新築祝）に匹敵するコタン（集落）の大祭だという。

「...集落への守護霊に対し、かつては盛大な儀礼が行われていた。この儀礼をコタンノミ（kotan-nomi = 集落への祈り オサチナイ）といい、1年に2回（春・秋）挙行され、樺太では、春4月の末ごろと秋10月の末ごろ、網走では春が4～5月、秋が10月中旬、斜里では、春が4月下旬～5月上旬、秋が10月中～下旬頃である。その他の地区でも、春秋の2回で時期もほぼ類似している。...（略）...夏の年の初に冬の年のお礼と、夏の年における満足できる生活への祈願を行い、冬の年の初めに夏の年のお礼と冬の年における満足できる生活への祈願を行っていた」（藤村久和「霊について」『民族調査報告書 総集編』北海道開拓記念館、1975年発行）

こうしてアイヌ民族博物館では、それまでの安全祈願祭をコタンノミに衣替えし、アイヌ古来の伝統に根ざした年中行事として定着させたいと考え、その第一回として5月12日、コタンノミを実施することに決定した。

「コタンノミ」の名称と趣旨

ところで、この儀式は大きな年中行事であるという割に一般には全く知られておらず、記録資料もごくわずかしかない。また「コタンノミ」という名称自体、管見の限り藤村以外に見当たらない。

春と秋の年二回、豊作・豊漁（獺）などを願う儀式を行ったことは、白老、静内、平取、有珠、本別など近年の文献にも残されている（北海道教育委員会『アイヌ民俗文化調査報告書』）。これによれば、ハルカムイノミ（静内、本別）という

名称が一般的なようだが、ヌタブカムイノミ、パーコロカムイノミ（静内）などの名も見える。

これと紛らわしいのが「病魔除けの祈り」で、ハルエカムイノミ（平取、千歳）、ハルエノミ（静内）、トゥパエカムイノミ（白老、幌別）、ハルソイオマレ（鶴川）、コタンエイノンノイタク（白老、平取）などと呼ばれる。こちらは年中行事として行われる場合もあるが、疫病流行の兆しがあった時に臨時に行う場合もある。ただ前者と明確には区別しがたく、葛野辰次郎氏（静内）の儀式では前者の一部として採り入れられている。

ちなみにハルとは「食料」のことで、前者ハルカムイノミは「食料（の豊穰）を神に祈る」、後者ハルエカムイノミは「食料で神に祈る」の意味。エー文字で儀式が異なる。「食料で祈る」とは、干魚の尾ひれや山菜、煙草、ヒエなどの食物（ニッネハル＝粗末な食料）を病神に供え、「この村にはこんな粗末なものしかありませんので、どうか豊かな他の村へ行ってください」と祈ることに由来する。また同じ病魔除けの儀式の中でも、ハルエカムイノミ（平取）は室内儀式、トゥパエカムイノミ（幌別、白老）は浜辺で行う屋外儀礼という違いがある（久保寺逸彦・知里真志保「アイヌの抱瘡神『パコロ・カムイ』に就いて」『人類学雑誌』55-3、4、日本人類学会、1940年）。

白老地方の伝承

春秋に行う儀式に関する白老地方の記録は、散見したところ田畑アキ媪の口述だけである。

「コタンエイノンノイタク kotan e-inonno-itak（村への祈りことば）は、春と秋に、浜にいて、東の方を向いてやる」（岡田宏明編『カムイエカシチャシ』、白老町教育委員会、1997年）

「風邪が流行しはじめた噂を聞きつけると、白老でもトゥパエカムイノミ tupa-e-kamuy-nomi = 幣場-で-神へ-祈る という儀式をはじめめる。この儀式はふつう2回（春と秋）、神々への祈願のときに行われるが、風邪が流行するきざしがあるときや、風邪が流行しはじめた風聞を知ったときにも臨時で行われる」（藤村久和編「民族調査ノート（6）」『北海道史研究』20、1979年）

資料が少ないので断定はできないが、ここでいう「コタンエイノンノイタク」と「トゥパエカムイノミ」は、共に浜辺で行う儀式で同一と思われる。逆に、傍点部「神々の祈願のときに行われる」ということは、「春秋の儀式」と「病魔除けの儀式」は同時に行われるが同じ儀式ではないと解釈できる。白老地方の豊作・豊漁（獵）を祈願する春秋の儀式、すなわち「コタンノミ」に類する儀式は、唯一この記述から存在が推測できるだけである。この他、白老の「病魔除けの儀式」については、満岡伸一『アイヌの足跡』（アイヌ民族博物館、1987年）にも詳細な観察記録がある。

葛野辰次郎翁の伝承

さて、白老地方の「コタンノミ」の記録はないに等しい。そこで今回の実施に際して私たちが基本とした資料は、ビデオ『フチとエカシをたずねて1 祈り・語り・食』（アイヌ無形文化伝承保存会1983）である。静内地方の伝承者・葛野辰次郎翁の自宅で収録された約25分の儀式映像がここに収められており、「かつてはこのようなかむイノミが春と秋の二回行われていました」というナレーションが入った儀式（名称不詳）のほぼ全容が紹介されている。「コタンノミ」を再現するに足る詳細な資料は、これをおいて他にない。

実はこの資料、『ポロチセの建築儀礼』（アイヌ民族博物館、2000年発行）の編集の際に詳細に内容を確認し、式順、作法などを文章にまとめてあった（同書pp.51-55）。これを見る限り、チセノミ（新築祝）からそれに特有な行事を省いただけである。一般的な大祭の進行で良いのであれば、ある程度白老地方の流儀に近づけることが可能であり、映画『北海道白老村 アイヌの生活』（八田三郎監修、1925年）や満岡伸一『アイヌの足跡』、過去に当館で実施した儀式記録などから資料の不足を補った。これもすでに同書「当館儀礼の全行程・解説」（pp.150-172）に整理済み。アイヌ語の祈り言葉については白老の採録例がほとんどなく、白老方言によることは困難であったため、大半を葛野辰次郎翁と織田ス

テノ媪の語彙によった。

以上、地方差の問題は静内・白老折衷の形ではあるが、各種資料を総合し、今回の儀式について大要以下のように整理した。

儀式の趣旨

- ・自然の恵みへの感謝と祈願
- ・安全祈願
- ・病魔除け（無病息災）
- ・先祖供養
- ・普段疎かになっている全祭神を祭る
- ・近隣コタン（ウタリ協会支部、関係機関等）との交流

儀式の進行（大要）

- ・病魔除けの祈り（ハルエオンカミ）
- ・火の神及び屋内の神々への祈り
- ・ヌサ（祭壇）に祭る自然界の神々への祈り
- ・祖先供養祭
- ・後祭（翌日）

こうして4月中旬から職員間で役割分担を決め、酒造りと関連儀礼、木幣削り、供物の準備などを進めつつ、5月1日からは徹夜を重ねながら儀式の台本を作成し、連日連夜の勉強会、リハーサルを実施し、5月12日の本祭となった。

儀式伝承の課題

今回の儀式実施にあたり、職員内では以下の課題を掲げていた。

- ・白老流の儀式の復元に努める。
- ・「自力本願」（＝葛野エカシの言葉）
- ・全員が声を出してアイヌ語で祈る。

アイヌ民族博物館は、これまでイオマンテや地鎮祭、新築祝などの大祭を10回近く重ねて



春のコタンノミ（2002年5月12日）

おり、儀式伝承については全道的にも実績が評価されてきたところだが、実際には栃木政吉翁（千歳）、日川善次郎翁（弟子屈）、葛野辰次郎翁（静内）などの伝承者や、研究者である藤村久和氏の指導を受けてきた。1997年からは内部的に月例の安全祈願の儀式を継続してきたが、祈り言葉は聞こえず、沈黙の中で形式的なものに終始してきたと言わざるを得ない。

教えを請うべきエカシたちも今はみな故人となり、今後は私たち自身の力で受け継いでいかなければならない。最難関はアイヌ語の祈り言葉だが、最初は原稿を棒読みでも良い。暗記だっって一念発起すればできるはず。某宗教団体の勤行などでは、アイヌであれ和人であれ一般人がお経を誦んでいるのではないか。

とはいえ、今回は原稿作成が遅れ、原稿の棒読みに終わらざるを得なかったが、全員が声を出してアイヌ語で祈り、何人かは誦んでいた人もあった。口の悪い人からは「学芸会」と呼ばれたが、まずは成功だろう。今後回を重ねれば立派なコタンノミになると信じている。

以下は葛野辰次郎翁が遺した言葉。

「最初は棒読みであっても、それがだんだん年を取ることによって、節も直せば、発音も直せば、立派な言葉になるんだぞって。俺はそれを楽しみにしてるの」「あのエカシはこうやって言ったけど、まあいいわ じゃだめよ。上手であろうが下手であろうが一生涯懸命やっていると、そのうち あんたの言うことはこの辺が下手だ ここをどうかうまく、神々の心の満足するように とやってもらうことが俺のひとつの願いよ」「だからね、アイヌのお祭りはね、それこそ神主の養成所よ」

末筆ではあるが、ウタリ協会白老支部及び胆振連合会、白老民族芸能保存会、白老町をはじめ、地元・近隣の関係者多数の参加をいただき、未熟な私たちを盛り立てて下さったこと心から感謝したい。コタンノミは「集落の祭り」であって、地域の参加は不可欠。今後年中行事として定着し、発展できるように長い目で見守っていただきたいと思う。

（安田益穂）

将来に向けての捕鯨

第4回世界捕鯨者協議会総会報告

世界捕鯨者協議会

昨年の9月25日から4日間にわたり、フェロー諸島の首都トルシャウンで、「将来に向けての捕鯨」と題した第4回世界捕鯨者協議会の総会が開催された。

世界捕鯨者協議会（WCW）は、1997年にNGO（非政府組織）として設立された団体で、様々な分野の専門家が、鯨資源の持続的利用を実現するためのサポートを行い、世界各地の鯨類を利用する先住民や捕鯨者の声を、世界に発信する役割を果たしている。

総会の開催地であるフェロー諸島は、18の島々からなる小国（デンマーク自治領）で、北大西洋のアイスランドとノルウェーの間に位置している。この島にヴァイキングが入植を始めた9世紀から、人々はゴンドウクジラを捕り続けてきた。そして現在も伝統的な鯨の追い込み漁が行われている。

将来に向けての捕鯨

総会の冒頭、フェロー捕鯨者協会会長が歓迎の挨拶で、次のようなことを述べた。

「フェロー諸島には捕鯨者と呼ばれる者はいないし、捕鯨船も無いが、世界でも有数の捕鯨共同体を維持している。

また、フェロー諸島には1584年から現在まで続く世界最古の鯨の年間捕獲記録がある。この長期に渡るデータは、私たちの鯨資源管理にとって重要であり、他の海洋資源の科学調査にも役立っている。

鯨資源に限らず、人間は多様な資源を利用している、という事実を目を向ける必要がある。これまでフェロー諸島は、反捕鯨運動の脅威にさらされてきたが、それにも関わらず私たちは捕鯨を続けてきている。反捕鯨運動は、私たちの捕鯨が違法だと強調し、私たちを世界から孤立させようとしてきた。しかし、私たちの共通



クラクスビクの港と漁師たち

の目的は、海洋資源の持続的な利用であり、WCWを通して、次の世代が鯨資源を利用できる状況を維持して行くことにある」

先住民の捕鯨

総会には、イヌイット（カナダ及びグリーンランド）、マオリ（ニュージーランド）、マカ（米国）、ヌチャヌフ（カナダ）、アイヌなどの先住民の他、ノルウェー、アイスランド、カリブ海地域の捕鯨者と科学者たちが参加した。日本からは、和歌山県太地町の捕鯨者、水産庁、日本捕鯨協会、日本鯨類研究所、日本小型捕鯨協会、鯨料理店の経営者らが出席し、開催国のフェローの人々も交えて、各地域の捕鯨の状況や問題点などについての意見交換が行われた。

私は以前から、先住民の捕鯨や、鯨の歯や髭などを利用した工芸品に興味を持っており、個人的に今回の総会に参加した。総会では、WCW議長のトム・メクスス・ハッピーヌク氏（ヌチャヌフ）と、これまで共同研究を行ってきた岩崎・グットマンまさみ氏（北海学園大学教授）の協力により、アイヌの捕鯨と鯨に関わる伝承についての、発表の機会も得ることができた。発表のなかでは、現在、アイヌ文化の伝承に必要な資源を利用することが、難しい状況にあることも報告した。

他の先住民の人々も、それぞれの地域の現状についての報告を行った。

ニュージーランド政府は反捕鯨の立場をとっており、マオリは鯨を捕ることが出来ない。しかし、鯨の骨、歯、髭を利用したマオリの伝統的な工芸は、芸術的に高く評価されており、彼らはそうした伝統文化を維持するためにも、座礁鯨の利用を求めている。

カナダの先住民は、憲法の先住権によって捕鯨の権利を認められている。しかし現在、ヌチャヌフはブリティッシュ・コロンビア州政府との条約交渉を進めている段階で、捕鯨再開の準備はできていない。さらに彼らは、長期に渡って鯨を利用できなかったために途絶えてしまっていた食文化を、いかに自分達のコミュニティに導入するかという問題も抱えている。

カナダ・ヌナブット準州では、科学者がイヌイットに対して、海洋哺乳動物の汚染の危険性について警告している。しかし、イヌイットにとって、それらの動物は重要な食料資源であり、彼らは国や科学者に対して、イヌイットの知識を活かした資源管理を行うことを望んでいる。

マカの状況はさらに深刻である。彼らは、米国政府との交渉により、一度は捕鯨再開を果たした。しかし、その後、政府との交渉のなかで、条約の内容がねじ曲げられ、マカ捕鯨委員会はバンド内部からも閉め出され、捕鯨再開の見通はついていない。米国政府は、マカは捕鯨をしなくても生活できるので先住民生存捕鯨のカテゴリーには当てはまらない、という見解を示している。

ゴンドウクジラの解体

総会の期間中、フェロー捕鯨協会の協力により、特別なワークショップが用意された。私たちは、トルシャウンからバスとフェリーを乗り継ぎ、別の島にあるクラクスビクという町へ渡った。その港では、茶色の伝統的なセーターを着てナイフをさげた男たちが待ち受けており、手漕ぎボートによる鯨の追い込み漁を再現して見せてくれた。その場に横たわっていたゴンドウクジラは、夏の漁期に捕獲され、今回のために冷凍保存されていたものである。

鯨の解体は、漁師たちの自慢のナイフで手際



クラクスビクの子供たち

よく行われ、部分ごとに仕分けされる。その傍らでは子供たちが小さなナイフを鯨の口に差し込み、大人たちに時々教えてもらいながら、一生懸命鯨の歯を取り出していた。

その姿を見ていると、「フェロー諸島には捕鯨者と呼ばれる者はいないし、捕鯨船もない」という捕鯨協会会長の言葉が思い出された。クラクスビクでは、食料の30%をまかなう鯨の肉と皮は、それぞれの世帯に無料で分配される。この島の人々にとって、食べるために鯨を捕るというのはごく当たり前のことであり、商業的な「捕鯨」とは全く意味合いが違うのである。

その場では、日本から特別参加した太地町の小貝佳弘氏（いさな組合組合長）も、持参した包丁と鉤で一頭の鯨をたちまちに解体してしまった。それを見ていた地元の漁師たちが、また負けじと腕を振った。どちらにも、伝統的な鯨捕りの技術が今も生きたものとして受け継がれていることを実感する光景だった。

アイヌも近年まで、鯨を含め多様な資源を利用してきた。それらに関する知識や文化を受け継いでいくためには、そのための環境作りが必要である。

現在進められているイオル構想も、アイヌ自身が主体的に関わり、どのように資源を利用し、文化を伝承していくのかを考えなければ、単なるテーマパーク作りに終わってしまう。他の先住民の状況も踏まえて、今後さらに議論を深めて行く必要があるのではではないだろうか。

（野本正博）

博物館短信

平成13(2001)年 10 月

- 1日 月例カムイノミ(当館ポロチセ)
辞令 学芸員:野本正博(学芸員補)
- 4日 中国黒竜江省民族博物館一行来館
- 5日 塩竈市教育委員会一行来館(アイヌ絵調査)
日本の滝協議会一行来館
- 10日 聞き取り調査(静内町=安田益穂)
- 11日 三次市議会視察団一行来館
- 13日 平成13年度第4回アイヌ文化教室「現代の博物館について」(博物館映像展示室=講師:佐々木利和・東京国立博物館民族資料室長、参加者56名)
- 14日 高橋辰夫名誉会長葬儀(苫小牧)
- 17日 聞き取り調査(静内町=安田益穂)
- 17-18日 「現代博物館・郷土資料館経営専門研修講座」参加(札幌=村木美幸)
- 19日 「森竹竹市展」資料貸出(白老町「蔵」=民具7点、写真15点、文献1点、合計23点)
- 19-20日 立命館大学国際言語文化研究所主催『異言語との共生』セミナー講師派遣(京都=野本正博)
- 19-22日 森竹竹市オープンリール音声資料複製(複製資料5点受贈)
- 24日 聞き取り調査(静内町=安田益穂)
- 26日 サハリン州郷土博物館一行来館
- 31日 聞き取り調査(静内町=安田益穂)
「森竹竹市文学展・写真展」展示協力(白老町「蔵」=村木美幸)

11 月

- 1日 月例カムイノミ(当館ポロチセ)
- 2日 平成13年度第5回アイヌ文化教室講演「北の縄文を読む」(当館研修室=講師:大島直行・伊達市開拓記念館館長、参加者22名)
- 4日 「アイヌ文化振興等施策推進北海道会議」出席(札幌=村木美幸)
- 6日 渡辺隆評議員辞任
- 7日 ミュージアム知覧・海江田義広学芸員来館(漆器等資料調査)
- 16日 日胆地区市町村研修一行来館
- 17日 平成13年度第3回理事会・評議会(組織分掌規定・博物館規則の改訂、基本財産の処分、借入、第二次事業計画・収支予算書変更案の承認、野村茂樹理事選任)

- 21日 自治労アイヌ民族博物館職員労働組合(野本正博委員長)結成
- 22日 理事協議会(職員組合結成について)
赤崎寿子評議員辞任
- 25日 台湾新世紀文化芸術団一行15名来館
- 29日 小石川保氏(苫小牧市)より資料受贈(着物一点)
- 30日 舟橋滋専務理事辞任

12 月

- 1日 月例カムイノミ(当館ポロチセ)
- 8日 「ポロト地区活性化会議」出席(木村直樹理事長、久慈幸男事務局長、野本正博)
- 8日-12日 広島道産子会創立10周年記念祝賀会公演(広島市=新井田幹夫団長以下14名)
- 17日 「白老町教育委員会アイヌ文化振興懇話会」出席(村木美幸)
- 20日 「アイヌ文化振興等施策推進北海道会議」出席(札幌=村木美幸)
- 21日 「ポロト地区活性化会議」出席(久慈幸男事務局長、村木美幸)
- 27日 「アイヌ文化振興と地域の活性化についての懇談会」出席(白老町役場=木村直樹理事長、舟橋滋専務、久慈幸男事務局長、村木美幸)
- 28日 仕事納め(5日まで年末年始休館)

平成14(2002)年 1 月

- 6日 年初カムイノミ(当館ポロチセ)
辞令 総務課長:伊藤博(1月1日付)
- 15日 「アイヌ文化振興と観光を語る新年交歓会」(白老町経済センター、役職員37名参加)
- 17日 「ポロト地区活性化会議」出席(久慈幸男事務局長、野本正博)
- 21日 「ポロト地区活性化会議」ヒヤリング(久慈幸男事務局長、村木美幸、野本正博)
- 22日 「ポロト地区活性化会議/堀貞一郎氏との協議・懇談」出席(久慈幸男事務局長、野本正博)
- 23日 ポロト地区活性化会議懇談会出席(白老=野本正博)
- 25日 川崎玲子氏(白老町在住)より資料受贈(写真資料一点)
- 29日 平成13年度第4回評議会委員会・理事会(理事長・専務理事・評議員の辞任について、職員労組結成について他)
- 31日 クラディウス・ミュラー・ミュンヘン民族学博物館館長来館(同館「アイヌ特別展覧会」の資料調査)

2 月

- 1日 月例カムイノミ(当館ポロチセ)
 5日 「第6回アイヌ文化振興等施策推進北海道会議」出席(札幌=村木美幸)
 7日 平成13年度第5回理事会(評議員選出=長谷川邦彦、林イツ子、濱ミツエ、田中幹夫)同評議員会(理事選出=上野正信、壬生龍之介、高石誠次)
 9-10日 「ポロトコタン冬のくらし」開催(体験館=伝統食展示、オハウ試食、記録映画上映)
 10日 北海道ウタリ協会千歳支部・資料貸出(民具3点)
 北海道ウタリ協会苫小牧支部・資料貸出(祭具3点)
 14日 平成13年度第6回理事会(役員選任=壬生龍之介理事長、野本勝信専務理事、川上源三常務理事)～記者会見
 15日 濱岡則子理事・水野勲理事辞任
 16日 「ポロト地区活性化会議」出席(久慈事務局長、野本正博)
 「アイヌ文化振興等施策推進北海道会議」現地視察団(第1班4名)来館
 19日 同現地視察団(第2班3名)来館
 21日 「アイヌ文化振興等施策推進北海道会議」出席(札幌=村木美幸)
 23日 北海道ウタリ協会長万部支部一行来館
 28日 「白老町教育委員会アイヌ文化振興懇話会」出席(白老町教委=村木美幸)

3 月

- 1日 月例カムイノミ(当館ポロチセ)
 「第1回アイヌ文化振興に関わる懇談会」
 4日 北海道開拓記念館・資料貸出(撮影・掲載アイヌ絵16点)
 5日 原隆之評議員辞任
 8日 ポロト地区活性化会議(久慈事務局長、村木美幸)
 9日 鳩山由紀夫・民主党代表一行来館
 11日 レナード・カマリング氏(アラスカ大学ドキュメンタリーフィルムセンター・ディレクター)来館
 12日 ジョイ・ヘンドリー・オックスフォード・ブルックス大学欧日研究会会長来館
 「第2回アイヌ文化振興に関わる懇談会」
 14日 仙台藩白老元陣屋資料館・資料貸出(アイヌ絵・文献・民具7点)
 15日 FIFAワールドカップ、外国人報道関係者一行30名来館

- 16日 北海道開拓記念館一行来館(アイヌ絵撮影)
 18日 「平成13年度アイヌ文化再現マニュアル作成企画委員会」出席(札幌=野本正博「イヨマンテ 料理・供物編」受託決定)
 18-21日 平成13年度文部省科学研究「海外アイヌ資料に基づくアイヌ文化の地域差・時代差に関する研究」研究会出席(札幌=村木美幸、児玉マリ)
 20日 「アイヌ文化振興等施策推進北海道会議」出席(札幌=村木美幸 中核イオル適地として白老町を選定)
 22日 『伝承記録のデジタルアーカイブ化に関する研究』事業完了(2001.8.20～=安田益穂)
 25日 平成13年度第6回評議員会・第7回理事会(平成13年度事業計画及び収支予算書の変更、旅費規程の一部改正案、平成14年度事業計画書及び収支予算書案の承認等)
 26日 『葛野辰次郎氏の伝承』刊行事業完了報告(静内町=村木美幸、安田益穂)
 27日 葛野辰次郎氏死去(91歳)
 27-31日 葛野辰次郎氏葬儀・職員派遣(静内町=安田益穂、野本正博)
 29日 佐藤幸雄評議員辞任
 29-31日 NHK「地域伝統芸能まつり」出演・資料貸出(東京=村木美幸、山丸郁夫)
 31日 久慈幸男事務局長退職(白老町からの出向を解く)
 『アイヌ民族博物館伝承記録6 川上まつ子の伝承-植物編2-』刊行(700部)
 『アイヌ民族博物館伝承記録7 葛野辰次郎の伝承』刊行(700部)
 『アイヌの歴史と文化』(日英)刊行(改訂第5版20,000部)

4 月

- 1日 月例カムイノミ(当館ポロチセ)
 7日 『川上まつ子の伝承』刊行事業完了報告(壮瞥町=村木美幸、本田優子)
 10日 辞令 事務局長:伊藤博(総務係長事務取扱)
 11日 庁赤れんが庁舎チセ展示派遣(札幌=野本正博、山丸郁夫)
 22日 川上源三常務理事辞任
 辞令 伝承課伝承係長:山丸郁夫(伝承係)
 27日 チッサンケ(丸木舟の進水式)(当館ポロチセ、湖畔=祭主:新井田幹夫)

5 月

- 1日 月例カムイノミ(当館ポロチセ)

- 中村齋館長就任
- 7日 白老JCふるさと創生委員会一行来館
- 12日 第1回「春のコタンノミ」開催(当館ポロチセ=祭主:山丸郁夫、翌日後祭 pp.4-6)
- 15日 「ポロト地区活性化会議」出席(中村齋館長、伊藤博事務局長、野本正博)
- 20日 韓国博物館関係者一行来館
旭川アイヌ語教室一行来館
- 21日 野草調査(静内町=村木美幸)
- 22日 平成14年度博物館事業検討委員会発足(座長:中村館長、副座長:村木美幸)
- 25日 平成14年度第1回アイヌ文化教室・講演会「博物館は役に立つか」開催(講師:中村齋館長、参加者56名)
- 30日 平成14年度第1回理事会・評議会(理事選任=中村齋常務理事、小川利孝理事、中出正理事、評議員選任=山田博子、森竹春次郎、事業報告・決算承認他)

6 月

- 1日 月例カムイノミ(当館ポロチセ)
ウタリ協会有珠支部青年部一行来館
- 4日 ブラジルグローブテレビ取材
アイヌ文化振興財団マニュアル検討委員会出席(札幌=野本正博)
- 6-8日 「北海道博物館協会学芸員部会研修」参加(利尻=中村齋館長、村木美幸、児玉マリ)
- 10日 中国広州市公式訪問団一行来館
- 11-12日 アイヌ工芸品展チセ展示打合せ(神奈川県立歴史博物館=野本正博、山丸郁夫)
- 15日 平成14年度第2回アイヌ文化教室「アイヌの伝統野菜『アタネ(センダイカブ)』について考える」(当館ポロチセ=講師:本田優子、参加者42名)
- 17日 平成14年度第2会理事会(旅費規程改訂、労使交渉報告等)
- 19日 全国博物館館長会議(東京=中村齋館長)
- 25-26日 道庁赤れんが庁舎チセ展示撤去作業(札幌=野本正博、塩田知治)

7 月

- 1日 月例カムイノミ(当館ポロチセ)
辞令 学芸員補:安田益穂(学芸課庶務係長兼務)
収蔵資料テーマ展「アイヌの儀礼具~イクバスイを中心に~」(~9月30日 第1回ミュージアムトーク、講師:安田千夏・元学芸員)
- 2日 アイヌ文化振興財団アイヌ工芸品展企画委員

- 会出席(札幌=野本正博)
- 5日 北海道開拓記念館・資料貸出(アイヌ絵16点)
ウタリ協会白老支部主催「シンヌラッパ」出席(白老ボンアヨロ=壬生理事長、野本専務、野本正博)
- 6日 第2回ミュージアムトーク「イクバスイとキケウシバスイ」(当館研修室=講師:安田千夏、参加者16名)
- 10日 北海道博物館大会出席(札幌=中村齋館長)
- 11-12日 北海道博物館大会(札幌=村木美幸)
- 14日 ウタリ協会穂別支部「チセノミ」出席(穂別=山丸郁夫)
- 15日 中国広州市人民代表大会常任委員会一行来館
- 18日 東大和천시議会一行来館
- 20日 平成14年度第3回アイヌ文化教室「ふだん着とかぶりもの」(当館映像展示室、講師:児玉マリ・当館特別研究員、参加者39名)
- 21日 苫小牧市女性政策課課長他25名来館
- 22-25日 機構アイヌ工芸品展・チセ展示派遣(神奈川県立歴史博物館=野本正博、塩田知治)
- 25-26日 「白老町消費生活展」アイヌ展示協力(村木美幸)
- 27日 国文化財指定記念事業「アイヌ生活用具コレクション」出席(沙流川歴史館=中村齋館長)
- 30日 「中核イオル整備推進期成会幹事会」出席(白老町役場=中村齋館長、村木美幸、野本正博)

8 月

- 1日 月例カムイノミ(当館ポロチセ)
- 2日 「まちづくりフォーラム2002」パネラー派遣(白老=村木美幸)
アイヌ文化振興財団「アイヌ文化フェスティバル」(札幌)
- 4-5日 「白老チャレンジスクール」受入
- 5日 絵画コンクール「コタンを描こう」応募締め切り(作品展示8-17日、応募48点)
- 10日 第4回アイヌ文化教室「サク アンチカラ アシトマ オルシペ 夏の夜のこわ~いお話」(当館ポロチセ=講師:本田優子、参加者41名)
- 10-11日 「親子で楽しむ工芸教室~貝げたとこま作り」開催(当館体験館)
- 12日 事業検討委員会(研修室)
- 17日 シンヌラッパ(祖先供養祭)(ポロチセ=祭主:新井田幹夫)
- 19日 「中核イオル整備推進期成会幹事会」出席(白老町役場=中村齋館長、村木美幸、野本

- 正博)
- 21日 ポロト地区活性化委員会(理事長、専務、事務局長)
- 21-22日 「アイヌ文化振興財団アイヌ工芸品展企画委員会」出席(札幌=野本正博)
- 25日 アフターブ・セット・インド大使夫妻来館
- 28日 養老町議会議員一行来館
- 30日 財団法人アイヌ文化振興・研究推進財団視察

- 授)・井上紘一氏(北海道大学教授)来館
- 18日 白老ベッカイムイノミ(初鮭を迎える儀式)開催(白老港ウヨロ河畔=祭主:新井田幹夫)
- 19日 胆振教育局初任者研修(当館研修室他=17名)
- 20日 酪農学園大学一行来館
- 21日 「しらおいチエブ祭」開催
- 24日 イオル幹事会=役場、館長・村木
- 30日 テーマ展「アイヌの儀礼～イクバスイを中心に～」閉幕

9 月

- 1日 月例カムイノミ(当館ポロチセ)
- 2-5日 アイヌ工芸品展チセ展示撤去派遣(神奈川県=野本正博、山丸郁夫)
- 5-6日 「海外アイヌ資料に基づくアイヌ文化の地域差・時代差に関する研究」研究会出席(札幌=児玉マリ、村木美幸)
- 7日 平成14年度第5回アイヌ文化教室「アイヌの儀礼～『葛野辰次郎の伝承』から～」(映像展示室=講師:安田益穂、参加者33名)
- 9日 中国光明日報取材
- 14日 C.M タクサミ氏(国立民族学博物館客員教

平成13年度入場者数 (人)			
H13年4月	11,852	10月	43,236
5月	30,613	11月	18,528
6月	46,362	12月	12,497
7月	35,372	H14年1月	7,152
8月	28,078	2月	18,586
9月	34,147	3月	8,586
			計 295,009
			(対前年度 23,383人、 7.34%)

アイヌ民族博物館出版案内

『伝承記録6 川上まつ子の伝承 - 植物編2 - 』

編集: 本田優子(当館特別学芸員)

B5判100頁(700部)/平成14年3月31日発行

アイヌ民族博物館所蔵の故川上まつ子氏(沙流地方伝承者 1912-1988)の聞き取り調査記録テープ146本のなかから、植物に関する伝承部分を抽出、活字化し、伝承記録として刊行。『川上まつ子の伝承 植物編1』(1999.3発行)の補遺にあたり、本書をもって『植物編』の完結となる。
(財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構 出版助成対象事業)

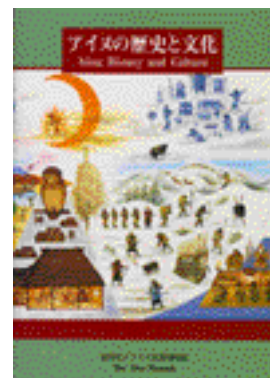


『伝承記録7 葛野辰次郎の伝承』

B5判492頁、CD4枚+DVD-ROM1枚、箱入り700部

平成14年3月31日発行

当館が所蔵する故葛野辰次郎氏(静内地方伝承者 1910-2002)の全資料を収録。聞き取り調査、折り詞等を収めた書籍の他に、イヨマンテ、地鎮祭、新築祝い、守護神の送り儀礼、初鮭を迎える儀式の折り詞の音声資料(CD)、儀式映像・テキストデータを収めたDVD-ROMを添付。
(財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構 出版助成対象事業)



『アイヌの歴史と文化』(日英版 改訂第5版)

B5判40頁総カラー、20,000部/平成14年3月31日発行

お馴染みのアイヌ文化入門書の改訂版。英文を全面改定。

(財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構 出版助成対象事業)